

---

# ねこねこぴーち

チェリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねこねこぴーち

### 【Nコード】

N83700

### 【作者名】

チエリ

### 【あらすじ】

遅刻ギリギリの朝、駅の階段から落ちた私。

突然現れた死神に猫にされ、そして身代わり捜しをする事に……。

- P r o l o g u e -

「きゃああああっ！ やばい、やばい、やばい――っ！――！  
行つて来まーす！」

この日、

私・門倉萌々（かどくらもも）は慌てて家を飛び出した。

昨夜、目覚ましの電池が切れた。

いや、正確には夜中にかな？

そろそろ電池が切れる頃だと思いつつ、目覚ましをセットした時点で既に

正確な時刻を刻んでいなかった。

私はそれに気付かずいつものように目覚ましをセットして眠ってしまったのだ。

で、今朝その目覚ましが鳴る前に妹に起こされた。

目覚まし時計を見ると明け方の四時十三分で針が止まっていた。

そんな訳で遅刻を全力で回避する為にダッシュで家を飛び出したのだ。

駅に着いてホームに下りる階段を駆け下りていると、電車が入ってくるのが見えた。

（あーっ！ 電車来てるうーっ！！）

いつも乗っている電車より二本後の電車だ。

これに乗り遅れてしまうとホントに遅刻してしまう。

しかし、そんな時に限って手に持ったままだった定期入れを落とす私。

「あっ」

階段の途中で足を止め、落ちた定期入れに手を伸ばした。

すると、急に立ち止まったものだから私のすぐ後ろにいた中年のサラリーマンがぶつかった。

「きゃっ!?!」

当然バランスを崩す私。

「危ねえなっ、もう!」

私の肩にぶつかったおじさんのチツという舌打ちが聞こえた。

そして、後頭部に物凄い衝撃を感じた。

……目を開けると真っ暗だった。

辺りを見回しても何も見えない。

何も聞こえない。

空気もひんやりしている。

瞬きを数回して暗闇に目が慣れるのを待っていると、背後に気配を感じた。

(……誰?)

恐る恐る振り返った。

すると、そこには漆黒のローブを身に纏った人物が立っていた。

顔は暗いし、フードを被っているからよくわからない。

辛うじてわかるのは腰の辺りまであるウェーブがかかった金髪と右手に持った大きな鎌。

「アンタ…… “カドクラモモ” ……？」

薄いピンク色の艶のある唇が怪しく動いた。

色気のある声…… けどとても低い声が耳に響く。

（……男？）

「そう、ですけど…… あなたは？」

「アタシはジャスミン」

「ジャスミン……さん？」

（この人、何者？）

「なーんか、資料と違う気がするけど…… ま、いいわ」



「?」

「んじゃ、サクツと狩って終わらせちゃうから大人しくしてなさい」?

「え? な、何をする気なんですか?」

「何つてもちろん、アンタの魂を狩りに来たんだからやる事は一つよ」

「ええっ!?!」

「んじゃ、行くわよ?」

ジャスミンと名乗った人物はそう言つと大鎌を振り上げた。

「ちょ、ちょっと待ってーっ!」

「んー、もっつ、何よ?」

「何がなんだか……さっぱり……」

「だ・か・ら、アタシはアンタの魂を狩りに来た死神なの！」

「し、死神……？」

「そ。アンタさつき、階段から落ちて死んだでしょ？ だからアタシが

こうしてわざわざ魂を回収しに来てやったのよ」

「え……私、死んだんですか？」

（う、うそおゝ？ てか、この人ひょっとして、お姉系キャラ？）

「そうよ。まあ、正確にはまだ死んでないけどね。あ、そうだ。

魂狩る前にちゃんと確認取っておかないとねー。

最近、上層部じやうぶがうるさいから」

「……」

「アンタ、名前と年齢言って」

「か、門倉萌々…… 17歳、です」

「はあ？ ちょっとおー、今から魂狩られるって人間が歳を誤魔化してんじゃないわよっ」

「じっ、誤魔化してないですよっ」

「ホント？」

「本当ですよっ」

私がそう答えるとジャスミンさんは身を屈めて顔を近づけて来た。

そして長く伸びた真っ黒な爪先で私の頬をつついた。

「うーん、確かにこの肌の張りや艶は17歳ねえー……アタシにはないわ。悔しいけど」

「……ジャ、ジャスミンさんも肌キレイですよお？」

「あらあ、嬉しい事言ってくれるじゃない　でも、魂はきっちり狩るわよ」

「は、はあ……」

別に媚を売ろうとして言った訳じゃない。

私の目の前にあるジャスミンさんの顔は本当に男性なのかと疑ってしまふくらいとても綺麗で

首元から名前の通り、仄かにジャスミンの香りもする。

「あー、でも、なんか腑に落ちないわねえー」

「何がですか？」

「アンタの情報、事前に上層部うえから聞いてたのと違うのよ」

ジャスミンさんは眉間に皺を寄せると、どこからともなく数枚の書類を取り出した。

（あの紙に私の情報が書いてあるのかな？）

「あ……」

そして十数秒後、ジャスミンさんの左の眉がぴくりと動いた。

（な、何……？）

「……」

ジャスミンさんは暫し考え、再び私に視線を戻した。

口の端が僅かに上がっている。

（何なのーっ？）

「ねえ、アンタ……」

「はい？」

「アタシと取引しない？」

「取引？」

「もし、アンタが望むならこのまま魂を狩らずに下界に戻してあげる」

「ほ、本当ですかっ？」

「但し、猫の姿でね」

「猫！？」

「でも、安心なさい。アンタの代わりになる魂を見つけたらちゃんと人間に戻してあげるわ」

「代わりって……そんな……っ」

「別にアタシはいいのよぉー？ このまま魂を狩っちゃっても」

「……」

「コレを見なさい」

ジャスミンさんはそう言う私の足元にどこか室内の様子を映し出した。

(…………あっ！)

「お父さんっ、お母さんっ、寧々っ」

映し出された光景の中には両親と妹の寧々（ねね）がいた。

それに、私もいる……

ベッドに寝ているのが私、それを囲むように両親と妹がいて悲しそうに俯いている。

「今の下界の様子よ。階段から落ちたアンタは頭を強く打って病院に運ばれた。」

けど、打ち所が悪くてね……今はまだアタシが魂を狩ってないから辛うじて息だけはしているわ」



「それじゃあ……」

「そう、今ここでアタシがアンタを狩れば……後はどうなるか、わかるわよねえ？」

「……」

「猫になってアンタが代わりの人間を見つけることが出来れば、魂はあそこにある体に返してあげる」

「でも……じゃあ、ここにいます私は？」

「今、ここにいるアンタは本物そっくりの仮初めの姿よ」

（仮初め……）

「またあの本物の体で家族の元に戻りたければ、代わりの人間を見つけないさ」

ジャスミンさんは足元に映る病室の様子を一瞥した後、私の目を鋭く見据えた。

顔にかかるほど長い前髪の下、その恐ろしいほどの眼光に捕らえられた私はただ頷くしかなかった。

- 2 -

……6、7、8、9、10……。

ジャスミンさんに十秒間目を閉じているように言われた私は頭の中で十数えた。

すると、さっきまで感じていたジャスミンさんの気配と香りが消え、辺りが明るくなった気がした。

(ここ……どこだろう?)

ゆっくりと目を開けてみると、そこは私の知らない場所だった。

ただ人通りが多い。

周りを見回してみても目線が低過ぎてよくわからない。

上を見上げてみると高架があった。

(駅の近くかな? てか、線路ってあんな高いトコにあったっけ?)

そこで私は気がついた。

（……そうだ、私、猫になっちゃったんだっ）

5 m先に見えるコンビニの前に行き、入口の自動ドアに映った自分の姿を確認する。

（猫だ……）

そこに映りこんでいたのは黒い猫だった。

小さな、小さな真っ黒い猫。

それが今の私の姿。

(さて、これからどうしようか?)

コンビニの前から見える駅を見つめながら考えていると、暫くして私の知っている人が

改札から出てきた。

「ニヤッ(あっ)」

それは私が片想いしている相手・新堂純平君<sup>しんどうじゅんぺい</sup>だった。

「ニヤアーン！(新堂くん！)」

思わず名前を呼びながら駆け寄る。

しかし、猫だから“ニヤ”としか鳴けなかった。

新堂君はいつも私が声を掛けると笑いながら手を振ってくれる。

だけど今日は何故かピタリと足を止め、怪訝な顔をした。

「ニヤ？（あれ？）」

（あ、そっか。今、猫だもんね）

私は眉間に皺を寄せたまま再び歩き出した彼について行った。

「……」

そして暫くすると無言で彼が振り返った。

その顔つきはあからさまに嫌そうだ。

（なんで、そんな顔するのー？）

「もー、ついてくんなよー」

「ニヤッ！？（えっ！？）」

「……」

新堂君はそう言つと早足でまた歩き始めた。

「ニヤアー……（新堂君……）」

（ひょっとして……）

「ニヤアー（待ってー）」

ついてくるなと言われたけれど、それでも私は彼の後を追った。

今度は気付かれないように。

（仔猫で良かった）

新堂君が振り向きそうになっても体がちっちゃいから何処にでも隠れられるし、

肉球のおかげで物音を立てずに後がつけられる。

そうして彼は何度も後ろを振り返って警戒しながら家の中に入った。

（ここが新堂君の家かぁー）

真っ白な壁に薄いブラウンの屋根の二階建てのお家。

玄関のドアがパタンと閉じられると中から彼が「ただいまー」と言ったのが聞こえた。



（ふみゅうー……新堂君の後を追いかけてみたのはいいんだけど……これからどうしよう？）

暫しの間、考える。

すると二階の部屋の窓が開いて新堂君の姿が見えた。

（あ、新堂君）

新堂君は私に気がつくともまた嫌そうな顔をした。

（まただ……やっぱり新堂君、猫嫌いなのかなあ？）

猫じゃなくて犬にして貰えばよかった……。

辺りがすっかり暗くなってきた頃、空を見上げると厚い雲で覆われていた。

いつもなら星が見えるのに今日は月すら見えない。

（雨、降りそう……）

そう思っていると顔にポタリと雨粒が落ちてきた。

（……冷たい）

一滴、二滴……段々、ポツポツと雨が強くなってきて、あつという間に

私の小さな体を濡らしていった。

（寒いよー……）

キヨロキヨロと辺りを見回してどこか雨宿りが出来る場所を捜している、

二階にある彼の部屋の窓が閉められ、カーテンが引かれた。

「ニヤアー……（新堂君……）」

窓際に映っているシルエットに向かって鳴いてみる。

けれど、私の小さな鳴き声は大きな雨音に掻き消された。

冷たい雨の中、

私は新堂君の部屋が見えるこの場所から動かずにいた。

そしてもう一度シルエットだけでも彼の姿を見る事が出来たら……  
と思いながら

カーテンが閉められた二階の部屋を見つめていると、フッと灯りが  
消えた。

（寝ちゃったのかな？）

時計を持っていないから正確な時間はわからない。

（雨、冷たいけどここにしよう……）

だつて、ここにいれば明日の朝、新堂君が学校に行く時に見送る事が出来る。

だから私はそのまま目を閉じて眠った。

「おい、チビ助」

それからどれくらいの時間が経ったのか突然、頭の上から声がした。眠りが浅かった私は、その声に目を覚ますと裸足にサンダルを履いた誰かの足元が見えた。

「……ニヤウー？（誰ー？）」

顔を上げると新堂君が私の目の前にしゃがみこんでいた。

傘を差して心配そうな顔で私を見下ろしている。

「おまえ、雨宿りもしないでずっとこんな所にいたら風邪ひいちゃうぞ?」

(だってー……)

「首輪してないトコみると野良か……まだこんなちっちゃいのに親猫が傍に

いないって事は捨てられたのか?」

新堂君はそう言つと雨で濡れている私の頭を軽く指で撫でた。

そして私の首根を掴み、ひょいと持ち上げて「しょーがねえーなあー」と

家の中に入れてくれた。

（新堂君のお家だー）

でも、ずぶ濡れの私は家の中に入れてもらっても寒くて震えていた。

（えーん、寒いよう）

新堂君は私の首根を掴んだまま家の奥へと足を進めた。

家族もみんなもう寝ているのか家中の灯りが消されている。

私は、ぷらーんと前足も後ろ足もバタつかせる事もなく運ばれていた。

すると、彼に「おまえ、大人しいヤツだな」と笑われてしまった。

（てゆーかね、おなかすいちゃったの……）

寒くて動けないというのもあるけれど、気がつけば朝御飯を食べたきりだった。

新堂君は玄関から廊下を通り、浴室に入った。

そして、私を浴室の床にそつと置くと温かいシャワーを体にかけてくれた。

「フミヤ〜ン（あつたか〜い）」

「あはは、おまえホントに気持ち良さそうな顔するなー」

（だって、ホントに気持ちいいんだもん）

「ほら、体もついでにきれいに洗ってやるから、大人しくしてろよ？」

「ミヤッ！？（えっ！？）」



「まさかと思うけど、洗ったらいきなり白猫だったってゆーオチはないよな？」

新堂君はアハハッと笑いながら掌にちよつとだけボディシャンプーを取って泡立てると

私の小さな体を撫でるように洗い始めた。

(もきやゝっ)

「よしよし、そのまま爪引っ込めてるよー？」

(も、もうダメ……キュン死しそう……)

背中を撫でるように洗った後、今度は仰向けにされておなかを撫でられていると、

新堂君が「あ……」と言った。

(?)

「おまえ、女の子だったのかー」

「ニャウー（そうだよー）」

「じゃあ、もっと優しく洗ってやんないとな？」

新堂君はそう言って二カつと笑うと、さっきまでよりももっと優しく撫で始めた。

……もう、昇天寸前です……。

「ちょっとここで待ってるな？」

新堂君はお風呂に入れてくれた後、私を抱きかかえて二階の部屋に連れて来ると、

私を残してまたすぐに下に下りて行つた。

(ここ、新堂君のお部屋かな?)

ちよつと探検。

部屋に入つてすぐ左側にクローゼット。

その奥に低めのチェストがあつてその上にテレビが置いてある。

窓際にある机の上は意外ときれいに片付いていて、机の横には新堂君のカバンと

壁際に制服が掛けられていた。

窓にはクリーム色のカーテン。

部屋の右側を占めているシングルベッドは鮮やかな薄いグリーンのシートだ。

(ん?)

そしてベッドの下に数冊の雑誌があるのが見えた。

(こ、これは……まさか……)

……見なかった事にしよう。

うん、そうしよう。

「ほら、温かいミルクだぞー、おなかすいてんだろ？」

しばらくして部屋に戻ってきた新堂君は温かいミルクが入ったお皿を私の目の前に置いた。

(し、新堂君……ありがとう)

ペロツと舌でちょっとだけ味見してみた。

熱くもなく、冷たくもないちょうどいい温度だ。

「ニャーン（おいし〜い）」

「いっぱい飲んで大きくなれよ」

新堂君は優しくそう言いながら頭を撫でてくれた。

「俺、ホント言つと猫嫌いなんだけどなー」

（っ！？ はううう……やっぱり新堂君、猫嫌いだったんだ……）

「でも、おまえは大人しいから大丈夫かも」

そう言つてミルクを飲む私の頭を撫でてくれる新堂君。

昔、猫で何か嫌な事があつたのかもしれない。

それでも、大人しいという理由だけでこうして頭を撫でてくれる彼はやっぱり

優しい人なんだと私は思う。

「じゃあな、チビ助」

翌朝、新堂君はそう言って私を家の前の道端に下ろした。

「俺、子供の頃に猫に引つ搔かれて大泣きした事があってさ、結構トラウマなんだよ。」

おまえはまだ仔猫だからここに置いて行くのは心配だけど……」

「ミュウウ……（そうだったんだ……）」

昨夜、新堂君にミルクを飲ませて貰ってお腹一杯になった私はそのまま眠ってしまった。

そして朝、彼の携帯の目覚ましのアラームで目が覚めた。  
すると私の体にはふわふわのタオルが掛けられていた。

（私が風邪引かないように掛けてくれたのかな？）

“ 結構なトラウマ ” なのに昨夜、新堂君は私を助けてくれた。

雨の中、寒くて寒くて震えている私を助けてくれた。

朝、登校する新堂君の姿を一目見るためだけにそこで蹲って寝ていた私を拾って

お風呂まで入れて温かいミルクまで飲ませてくれた。

（新堂君、ありがとう）

「可哀想だとは思っけど、俺、やっぱり猫苦手なんだよな！。

今はちっちゃいし、大人しいかもしれないけど、この先おまえが  
どんどん大きくなって

俺の事、引っ掻くかもしれないだろ？ そうなったらおまえの事  
嫌いになるかもしれない」

「ニヤアーン（引っ掻いたりしないもん）」

「頑張って生きろよ」

彼はそう言つと私に手を振つて歩き出した。

私はその後姿を暫く見送つた。

見送つて、こっそり後をつけた。

彼は時々振り返っていた。

その度に私は物陰に身を隠していたけれど駅に入る前、彼がクスツと笑つた。

多分、私が後をつけていた事がバレバレだったんだろう。

そして、彼は改札を通つて見えなくなつた。



（行っちゃった……）

本当なら私も今頃電車に乗って学校に通っている時間だ。

（でも、また夕方ここで待ってれば会えるかな？）

“猫嫌い”の新堂君に付き纏うつもりはないけれど、遠くから見つめるくらいなら

許してくれるよね？

数日後。

あれから私は新堂君の後をずっとつけていた。

朝は家から駅まで、夕方は駅から家まで。

でも、新堂君には気付かれないようにした。

見つかってしまうとまた私を気にして猫嫌いなのに無理して優しくしてくれる気がするから。

だから、絶対気が付かれない様に新堂君の後について行った。

人間だったら完璧に“危ないストーカー”だ。

わかってはいるけれど、今日も朝から学校に向かう新堂君を駅で見送った後、

ポーツとしているとどこからかジャスミンさんの声が聞こえた。

「ちょっと、アンタ」

「あ、ジャスミンさん」

（いつの間に現れたんだろ？）

こんな変わった格好をしている人物が立っているのに周りの人達はジャスミンさんの姿が見えていないみたいだ。

みんな驚く様子もない。

「『あ、ジャスミンさん』じゃないわよ。何やってんのよー」

「え？」

「まさか、アンタ……自分がなんで猫になつてんのか忘れた訳じゃないわよねえ？」

（あ……）

「アタシはアンタに代わりの魂を探させる為に猫にしてやったのよ？」

好きな男のストーカーをしろとは一言も言っていないわよっ」

「わ、わかってます」

（そうだった……忘れてたー）

「どう見ても“忘れてました”って顔だけど？ ま、いいわ。

とにかく、チンタラしてないで早く見つけなさいよ？」

ジャスミンさんはそう言うのと私の目の前から霧が晴れる様に消えていった。

“代わりを見つける”

改めて言われても私の代わりに死んでほしいと思う程恨んでいる人はいないし、

係わりも無ければ何の恨みもない人を代わりにする訳にはいかない。

（どうしようかなー）

そして、その場で考え込んでいると今度は数匹の猫が私に近づいてきた。

「ニャゴー（ちょっと、そこのおちビちゃん）」

「ニャーン？（この辺じゃ見かけない顔だねえ？）」

「ニャオー？（新顔？）」

「ニャアーゴ？（数日前からよくうるちよろしてるけど、俺達への挨拶がまだじゃねえ？）」

斑や茶とら、きじとら、三毛、後はベンガルの野良猫達は私の左右と後ろを囲んだ。

（……っ）

私は思わず逃げ出した。

「フニャーッ！（コラ、待てっ！）」

後ろを追いかけてくる大きな猫達。

仔猫の私は一生懸命走った。

でもきつと簡単に追いつかれてしまう。

それでも私は必死で走った。

新堂君の家に向かって。

無意識のうちに足が向かっていた。

野良猫達との距離はまだある。

（なんで？　なんで、追いつかれないの？）

その理由はそれからすぐにわかった。

駅から離れ、かなり人通りが少なくなった住宅街に入ったところで  
野良猫達が

追いかけてくるスピードが一気に速くなり、あっと言う間に私に追いついた。

「ニャーゴー？（ここら辺でいいんじゃないか？）」

一番大きな体のボスみたいな斑猫が私の目の前に回り込んだ。

私が足を止めて立ち止まると、今度は全方向を囲まれた。

どうやら駅前の人通りが多い場所を避けたかったようだ。

（し、新堂君……怖いよ……）

「ありがとうございます」

ふかふかの暖かいベッドの中にいる感覚の中で新堂君の声が聞こえた気がして目が覚めた。

「お大事にー」

これは知らない人の声。

クンクン……

（消毒の臭い……病院？）

自分は今、どこにいるんだろうか？

顔を上げようとして体中に激しい痛みが走った。

「ニヤッ！？（痛っ！？）」



「お、目が覚めたみたいだな」

「ミャウ？（あれ、新堂君？）」

新堂君が私をタオルに包んで両腕で優しく抱えてくれていた。

「学校から帰ってきたら、いきなりおまえが血だらけで家の前にぶつ倒れてたから

びっくりしたぞー？ 近所の野良に苛められちゃったのか？」

（……………そうだ、私……………あの野良ちゃん達に囲まれていっぱい引っこかれたり、

噛みつかれたりして怪我をして夢中で逃げて、でもおなか为空き過ぎてて

意識が朦朧としていて……………そっか……………それで私、新堂君のお家の前で倒れてたんだ）

「でも、深い傷はないからすぐに治るって獣医さんも言ってたからちょっと安心した」

そう言った新堂君はまだ制服を着たままだった。

「ミユウー……（新堂君……）」

学校から帰ってすぐに私を病院まで連れて来てくれたんだ。

「ごめんな。俺があの時、おまえを置いていかなかったら、こんな怪我しなくて済んだのにな」

新堂君は後悔した様に私の頭を撫でた。

「ミヤウー（新堂君の所為じゃないよ）」

「でも、今日からは苛められないように俺が守ってやるから」

「ニヤフツ？（えっ？）」

（そ、それってー……と言う事はー……私……私、もしかして……）

「家に帰ったら一緒にご飯食べような？　おなかすいてるだろ？」

（新堂君のペットになったって事……っ？）

「今日はもう遅いけど、明日おまえに似合う首輪をちゃんと買ってやるからな」

新堂君はそう言うと私の喉元を人差し指で軽く撫でてにっこり笑った。

翌日。

「ただいまー」

夕方六時過ぎ、新堂君が学校から帰って来た。

「ニャーン（おかえり〜）」

「チビ助、いい子にしてたか？」

「ミャー（うん）」

「そうか、よしよし。じゃあ、ご褒美あげなくちゃな」

新堂君はそう言つとカバンの中をゴソゴソと探り、小さな袋を出した。

「約束通り、おまえの首輪を買って来たんだ。気に入るといいけどなー？」

そう言つて新堂君がカバンから出したペットショップの袋から出てきた物は可愛いピンク色の首輪だった。

真ん丸いゴールドのバックルに同じゴールドのハートのチャームが付いている。

「ニャオッ （わぁっ）」

「着けてやるから引つ搔いたりしないでじつとしてろよー？」

「ニャン（うん）」

（てか、新堂君まだ私が引つ搔くと思つてゐるんだ？）

猫になつたと言つても私は爪なんて立てゐる事しないのに。

「よーし、これでどうだ？」

新堂君は首輪を付けた私を抱き上げ、そしてニカッと笑つた。

「うん、可愛い」

「ニヤハアーン（ありがとー、新堂君）」

「あはは、気に入ったみたいだな、チビ助」

「ニヤウニヤウ（もちろん）」

「あー、でも……」

「フニ？（うん？）」

「女の子に“チビ助”はなー……よしっ、名前を付けよう！」

新堂君はそう言つと私を目の前にストンと下ろし、

「うーん……そうだなあー……」

私の顔をまじまじと見つめながら腕組みをして少し考えた後、

「“ピーチ”にしよう!」と言った。

（“ピーチ”？）

「首輪もちょうどピンクだし、決めた!」

（首輪の色からとったの？）

「ピーチ」

「ニヤーン（はい）」

「お、返事した。てか、おまえ人間の言葉がわかってて相槌するみたいに」

「鳴く時があるよな!」

（だって、わかってるもん）

そうだよ……わかってるんだよ。

けど……そんな風に見つめ返しても彼は“私”だと気付かない。  
。

「ビーチ」

翌朝、新堂君の声で目が覚めた。

「学校、行つて来るから。ちゃんと良い子にしてるよ?」

「ミャウー（うん）」



優しく頭を撫でてくれる新堂君。

それがとっても気持ち良くて思わず私は甘えた声になった。

「帰って来たらまた一緒にご飯食べような？」

新堂君はそう言つと私に手を振つて部屋を出た。

窓際に行つて彼の後ろ姿を見送つてしていると私の視線に気付いたのか  
振り返つて小さく笑つた後にまた手を振ってくれた。

(……幸せ)

別にもう人間に戻れなくてもいい。

私の体に戻るより、このまま仔猫でいた方が新堂君の傍に居られる。  
ずっと近くにいられるもん。

数週間後。

私の怪我也すっかり良くなった。

そんなある日の夕方、

新堂君がいつもより遅い時間に帰宅した。

「ミャウウー？（新堂君、どこ行ってたの？）」

私が話し掛けると、新堂君はとても哀しそうな顔で私を抱き上げた。

「ピーチ……」

「ニャア〜ン？（どうしたの？）」

新堂君は暫く腕の中で私の頭を撫でた後、意外な事を口にした。

「俺、好きな子がいるんだけどさ……」

（え……っ！？）

「ここ最近、ずっと見かけなくて気になってその子のクラスメイトに訊いたら……怪我で入院してるって……」

（……新堂君、好きな人がいたんだ……？ ショック……）

「今日、その子が入院してる病院に行つて来たんだ……」

（それで遅くなったんだ？）

「……けど、その子……息はしてるのに、意識がなくて……」

新堂君はとても辛そうで……今にも泣き出してしまいそうだった。

「まるで……死んでるみたいだった……」

（死んでる……？）

「俺がいくら名前を呼んでも、話し掛けても……無反応だった……、いつも俺が『門倉さん』って呼んだら、すぐに振り向いて笑ってくれたのに……」

（……え？ “門倉さん”？）

「その子さ……“萌々”って言う名前なんだ。可愛いだろ？」

「ニ、ニヤーン……（う、うん……）」

（わ……私っ！？）

「実は、おまえの名前、その子の名前から取ったんだよ。

本当は“桃”じゃなくて“萌々”なんだけどな、“桃”のピーチ」

60

（そうだったんだ……）

「……門倉さん、大丈夫かな？ このまま目が覚めなかったら……」

（新堂君……）

「ニャオー（大丈夫だよー）」

「あはは、ピーチ、俺を慰めてくれてるのか？」

（じゃなくて……私、絶対、“代わり”を見つけるからっ）

だって……そうすれば、私は人間の姿で再び新堂君の前に姿を現す事が出来るんだもん。

「慰めてくれたお礼って訳じゃないけど、明日は学校休みだし、久々に何も予定無いから、

いっぱい遊んでやれるぞ？

おまえの傷もだいぶ良くなって来たし、天気がよかったら公園にでも散歩に行くか」

「ニャウー（やったー）」

夜、

新堂君と晩御飯を食べた後、彼の膝の上で一緒にテレビを見ていると、携帯が鳴った。

着信表示を見るなり眉間に皺を寄せる新堂君。

(?)

「……………もしもし?」

そして、ちよつとだけ不機嫌そうな声で話し始めた。

(新堂君がこんな嫌そうな顔するのって……………誰からだろ?)

会話の内容までは聞き取れないけれど、新堂君の携帯の向こうからは微かに女の子の声が聞こえた。

(……誰?)

なんとなく聞き覚えのある声だけど……

(んー? 誰だっけ……?)

その後、

私が考えている間に電話終了。

「ピーチ、ごめん……せつかく明日は休みだからゆっくり一緒に遊



べると思つてたのに、

予定が入っちゃったよ……」

「ニウー？（えー、何？）」

「同じ高校の子なんだけどさ、なんか話があるんだって……呼び出された」

（それって……告白とかじゃないの？）

「断ろうと思つたのに……強引に電話切られた。

けど、なるべく早く帰って来るから」

そう言つて優しく私の頭を撫でる新堂君。

「ピーチ？ 怒つたのか？」

頭を撫でられても何も反応しないでいると、私が怒つたと思つたのか

彼はちよつと困り顔で私を抱き上げた。

（怒ってないけど、このまま無反応だと新堂君はどついつ反応するかな？）

「ごめんって……機嫌直せよ……」

そう言つて優しく長い指先で私の頭を撫でて……

そして、チュツと小さく音を立てて軽くキスをした。

（え……）

「今の、俺のファーストキスなんだぞ？ おまえに捧げるから、機嫌直せ？」

（し、新堂君……）

「……で、おまえにとってもファーストキスだよな？」

「ニ、ニウ……（う、うん……）」

「お、やっと反応した。女の子ってやっぱキスに弱いのか？」

（し、新堂君、それはー……何から得た情報？）

「じゃあ、ピーチ、すぐ戻って来るから。大人しく待っててな？」

午前十時前、新堂君は出掛けていった。

（こっそりついて行っちゃおっかなー？）

大人しく待つてなんかられない。

だって、誰と会うのかすごく気になるもん。

私はいつも少しだけ開いてる窓から外に出た。

彼に気付かれないように行くと、駅前の通りに出た。

（電車に乗るのかな？）

もしそうならこれ以上の尾行は出来ない。

しかし、それでも一応ついて行く。

すると彼は駅の近くにある公園に入った。

私も後に続いて入ると、すべり台やブランコの遊具の向こう、一番奥のベンチに私と同年くらいの女の子が座っていた。

その子へと近づくと新堂君。

（待ち合わせの相手ってあの子かな？　なんとなく

見た事がある気がするけど……誰だろう？）

顔を確かめたくてそろりそろりと近づいてみる。

新堂君がその女の子の前に立つと、彼女はゆっくりと恥ずかしそうに顔を上げた。

（……あ）

その女の子の顔がはつきり見えた瞬間、私は自分の予感的中したのだと感じた。

だって、いつも何かと新堂君にぴったりくっついてるあの伊崎奈保子だったから。

「新堂君……私の事、どう……思ってる？」

伊崎さんは少し俯いて彼に訊ねた。

「どうつて……」

困ったように眉根を寄せる新堂君。

私はドキドキしながら茂みに隠れて聞いていた。

「新堂君は今、好きな子とか……いるの？」

「……うん」

「誰？」

「……」

「教えて？」

強引に聞き出そうとする伊崎さん。

「誰だっていいだろ？」

そんな彼女に新堂君は少し素っ気無く返した。

「……門倉さんでしょ？」

伊崎さんは絶対の確信があるのか、そうなんでしょ？ という感じで新堂君を見つめた。

「昨日、彼女のお見舞いに行ったでしょ？」

「どうして、それを……っ？」



「門倉さんが入院してる病院、うちの病院なの。」

それでパパが私と同じ学校で同じ学年の子が入院してるって言うてたから、

誰かと思って見に行つたの……そしたら……新堂君が門倉さんの病室にいたから……、

別になんとも思っていない子なら、わざわざお見舞いなんて行かないでしょ？

だから……もしかして新堂君、門倉さんの事、好きなんじゃないかと思つて……」

「……」

「彼女の事、想つてても無駄よ？」

「それ……どついう意味？」

「あの子、もう何日も意識がないの。辛うじて集中治療室には入ってないけど、」

ナースステーションの目の前の病室にいる意味……新堂君だってわかるでしょ？」

（それって……いつ容態が急変するかわからないとか、そういう事？）

「……」

新堂君は黙ったまま俯いていた。

「もし、新堂君が私と付き合ってくれるなら、門倉さんの事、助けてあげる」

（え……？）

「……っ」

新堂君はハッと顔を上げた。

「今のままだと、多分、後何日もしない内に死んじゃうわ。」

でも、新堂君が私と付き合ってくれて言うなら、パパに頼んで

最高権威の医師を呼んでもらうからっ」

（何よ……それ……）

私はまさか彼女が私の命と引き換えに新堂君に交際を迫るだなんて  
思ってもみなかった。

次の瞬間……、

どこからか、ジャスミンの香りがした。

（……ジャスミンさん？）

「ちょうどいい子が見つかったじゃない？」

その声に振り返ると、不気味な笑みを浮かべたジャズミンさんが立っていた。

「あの子、殺しちゃいなさい」

「え……伊崎さんを、ですか？」

「そうよ……あの女、アンタの命を盾にして交際迫ってんのよ？」

だけどアンタがあの子の命を狩れば、あの子は死んでアンタは元に戻る事が出来るわ。

「こない事ないじゃない？」

「で、でも……」

「いいの？ このままだとアンタが好きなあの男……あの女に取ら

れちゃっわよ?」

「……」

「その医者なら……確実に門倉さんを助けられるのか?」

私が新堂君の方に振り返ると、彼は真剣な目で言った。

「俺が伊崎さんと付き合えば門倉さんは本当に助かるのか?」

(……新堂君?)

「ええ、そうよ」

(駄目だよっ! だって、私、本当はもう死んでるんだよっ?)

代わりを見つけないと助からないんだよっ?)

「ニャフーッ！（騙されちゃ駄目ー！）」

私は思わず茂みから飛び出し、新堂君と伊崎さんの間に割って入った。

「きゃっ！？ 何よ、この猫っ」

「ピーチッ！？」

「……え、この猫……新堂君、知ってるの？」

「ああ……俺の猫」

「そ、そう」

「ピーチ、おまえ、家にいたんじゃないの？」

そう言って優しく私を抱き上げる。

「ニー（だつてー）」

「俺を迎えに来たのか？」

新堂君は優しい笑みを浮かべて私の頭をよしよしと撫でた。

「ビーチが迎えに来たから、帰るよ」

「えっ！？　ちょ……っ」

「それじゃ」

新堂君はくるりと踵を返した。

背中の方で伊崎さんが何か言っている。

「ニヤウー？（放っておいていいの？）」

「おまえが来てくれて助かったよ、ありがとな」

公園を出たところで新堂君が私を抱いたまま言った。

「……でも、門倉さん、大丈夫かなあ？

やっぱり……伊崎さんと付き合った方がいいのかな？

そうすれば、門倉さんは助かるって言ってたし……」

（新堂君……）

「あの女、明日にでもまたこの彼のところに来るわよ？」

気がつけばジャスミンさんが後ろをついて来ていた。

もちろん、ジャスミンさんの声は新堂君には聞こえていないし、

姿も見えていない。



「アンタが誰かの命を狩らない限り、あの女は彼に迫り続けるわよ。  
彼は拒み続ける事が出来るかしら？」

今ですらこんなにアンタの事を想ってるのよ？ さっきだって。

アンタがこのままずっと目を覚まさなかったら……わかるわよね  
？」

（私が目を覚まさなかったら……）

「さあ、今すぐこの死神の鎌であの女の命を狩ってらっしゃい！」

ジャスミンさんは私に大きな鎌を差し出した。

怪しく黒光りしている大きなその鎌を私は受け取った。

「……あれ？ ピーチ？」

私の姿は仔猫から元の姿に戻っていた。

しかし、彼には見えていないらしい。

「いつの間になくなったんだろ？」

新堂君はキョロキョロと辺りを見回して、仔猫の私を捜した。

「さあ、行くわよ」

ジャスミンさんはそう言って私の肩を抱いた。

「ほら、あの女、まだあそこにいるわよ」

ジャスミンさんに連れられ、公園に戻るとさっきのベンチに伊崎さんは座っていた。

何か考え事をしているのか俯いている。

「さあ……その大鎌を女の首に掛けなさい」

そう言って私の背中を押すジャスミンさん。

伊崎さんの目の前で足を止め、ゴクリと息を呑む。

（伊崎さんさえいなくなれば……）

大鎌を両手で持ち上げ、構える。

私の背丈よりも大きな鎌なのに、まったく重さを感じないのは今の私のこの体が

“本物”ではない事を物語っていた。

（私が伊崎さんの魂を狩れば……）

「鎌を振り上げて……」

ジャスミンさんが耳元に囁く。

私はその言葉に従い、大鎌を振り上げた。

彼女の魂をこの大鎌で狩りさえすれば、私は元の体に戻る事が出来る。

しかし、なかなか振り下ろす事が出来ない。

「何をもたもたしているのっ？」

少しイラついたようにジャスミンさんが言う。

「アンタ、あの男の事が好きなんでしょっ？ この女に取られてもいいのっ？」

「そ、それは……」

（嫌だけど……）

「アンタがその鎌を振り下ろせば、彼を取られる事もないのよっ？  
彼ももうこの女に迫られる事はないのっ。彼はアンタのものになるのよっ？」

「……っ」

そして私は……

私はゆっくりと鎌を下ろした。

「……アンタ、バカ？」

呆れたようなジャスミンさんの声。

私は出来なかった。

伊崎さんを殺せなかったのだ。

「ごめんなさい……やっぱり、私……出来ませんっ」

（無理……誰かを殺して、自分の命を守るだなんて……）

「そう……それじゃあ、やっぱりアンタの魂を狩るしかないわね？」

大鎌をジャスミンさんに返すと、彼はとても冷酷そうな目で言った。

「まったく……うまく行けば上層部<sup>うえ</sup>に気付かれずに済んだのに……」

ジャスミンさんは冷ややかに呟きながら大鎌を振り上げた。

「……っ」

私はぎゅっと強く両目を瞑った。

首筋を何かが通った気がして、“狩られたんだ”と直感する。

でも、痛みも何も感じなかった。

（ああ……これで本当に死んじゃったんだ……）

もう……

新堂君に会えないんだ。

「あーあ……彼、可哀想に」

ジャズミンさんの声が聞こえ、ぼんやりしていた周りの景色が段々ハッキリしてきた。

いや……

そうじゃない。

また、あの空間に連れて来られたのだ。

ジャズミンさんと初めて会った真っ暗闇の空間に。

ハッキリ見え始めたのは、私の足元に映し出されている新堂君の姿だった。

「新堂君……っ」

彼は、あの公園のベンチの前、小さな黒い仔猫の亡骸を抱いて泣いていた。

さっきまで私の魂が宿っていた仔猫だ。



“ピーチ……ピーチ……”

彼の口元の動きをみると、そう叫びながら涙を流していた。

そして、もう一つ、ジャスミンさんは私の“本物”の体が横たわっている病室の様子を映し出した。

「あ……」

顔には白い布が掛けられていた。

それが何を意味しているかは説明されなくてもわかった。

お父さん、お母さん、寧々が泣いていた。

「アンタがあの子を殺せなかった所為でいろんな人が悲しむ事になったわねえ？」

「……」

「今さら、泣いても遅いのよ」

ジャスミンさんに言われ、私は自分が泣いているような気がした。

でも、本当に泣いているのかどうかわからない。

魂だけになってしまったから。

涙を流しているかどうかさえ感じられなくなってしまったのだ。

「それじゃ、そろそろ行きましょうか」

「……どこへ、ですか？」

「もちろん、“あの世”に決まってるでしょ？」

（あの世……）

しかし……

「さあ、行くわよ」

そう言つて、ジャスミンさんが両手を広げた時、

「待て！」

どこからかとても低い声が聞こえた。

声の主は暗闇の中からスッと姿を現した。

「っ！？」

それと同時に声にならない声を上げ、禍々しい光を佩びた球に包まれるジャスミンさん。

「ジャ、ジャスミンさんっ!？」

光の球に包まれた途端、ジャスミンさんはぐったりした。

その手からは大鎌もなくなっている。

「心配するな。強制送還と連行する間だけの事だ」

艶やかな低音ボイス。

淡々とした口調のその人は腰よりも長いストレートの黒髪でジャスミンさんと同じ様に

漆黒のローブを纏っていた。

ただ一つ違う事と言えば、とてもキレイなシルバーの指輪をしている事。

「強制送還と連行って……どういう事ですか？」

「ジャスミンは死神界の掟を破った」

「淀……？」

「そうだ」

「……あなたは、一体……？」

「私は死神界を管理している組織の一員だ」

（じゃあ……ジャスミンさんが言ってた“上層部”<sup>うえ</sup>っていうところの人？）

「今回の一件、おまえは何も知らなかったようだな」

「どういう事ですか？ ジャスミンさん……何をしたんですか？」

「まず、今回の事はジャスミンが間違えておまえの魂をここに呼んだ事が原因だ」

「“間違えて”……？」

「そうだ、本来はこの人間が狩られるはずだった」

そう言うと彼は数枚の紙を私に見せてくれた。

その紙には名前や年齢、経歴なんかも書いてあった。

「『門倉 桃、89歳』……っ？ こ、これ……っ」

「ジャスミンはその資料の経歴を見て間違いに気付いた。

だが、ペナルティから逃れる為に知恵を働かせたようだな」

“あ……”

（そういえば……あの時、ジャスミンさん……）

「ここでこの資料に書かれている内容と魂を照合し、間違いがなければ狩る。

しかし、間違っている場合は速やかに魂を元に戻さなければならぬ。

それが今回ジャスミンは戻す事無く、おまえを利用した。

おまえを使って他人を狩らせ、その他人に本来狩るべきだった人間を狩らせる。

いきなり自分と同姓同名の人間を狩らせるとおまえに怪しまれるからな。

だが、それは死神界にとっては重罪だ」

「ジャスミンさんは、どうなるんですか？」

「禁固刑千年だ」

「千……っ！？ そんな……っ」

「我々死神は人間の魂を狩る事の出来る唯一の存在だ。

その分、魂の取り扱いには慎重でなくてはならない。

おまえ達人間界でも人を殺めたらそれなりの罰を受けるだろう？

それと同じ事だ」

「で、でも……千年で……」



「死神の寿命は約1、500年だ。

ジャスミンは今200歳……千年牢獄の中で過ごしたとしても300年は死神としてやり直せる」

「そうですか……ところで、ここって……どこですか？」

「おまえ達人間の住む“下界”と我々死神と天界人の住む“天上界”の間の空間だ」

「空間……」

「我等死神が狩るべき魂をここへ呼び、鎌で狩り取った後、天上界へ送る為の場所だ」

「そんな空間が……」

「後一秒、私の到着が遅れていたら、おまえの魂は天上界へと送ら

れ、

二度と元の体で下界へ戻る事は出来なかっただろう。

間に合ってよかった……」

黒髪の男がほうつと息を吐く。

「あ、ありがとうございます」

「いや……こちらの方こそ我等死神の不手際に巻き込んでしまって  
申し訳なかった。」

それで、この後の事だが……」

「は、はい」

「おまえがジャスミンによってここへ連れて来られた日まで遡る」

「え……駅の階段から落ちた日の事ですか？」

「そうだ」

「それじゃ、私は……死ななくていいんですかっ？」

「ああ、元々あの日、階段から落ちるのはおまえではない。

遅刻しそうになったのもジャスミンの仕業だ。

あの日の朝に戻り、その先の時間をやり直すのだ。

但し、おまえが猫になっていた間の記憶とここでの記憶は全て消させてもらう。

それでもいいか？」

「は、はい……っ」

「では……」

「あ、ちょっと待って下さいっ」

「うん？」

何かを念じようと目を閉じかけていた黒髪の男が怪訝な顔を向けた。

「ジャスミンさんによろしく言っておいてください」

「……ああ、わかった」

黒髪の男はフツと微かに笑うと私に向かって再び何かを念じるように目を閉じた。

私は、なんだか頭の中が段々と霞が掛かっていくような感覚に囚われた。

ピピピピピッ、ピピピピピッ、ピピピピピッ、

よく晴れた日の朝、電池を取り換えたばかりの目覚まし時計はいつもよりも大きな音を鳴らして私を起こしてくれた。

「うーん　気分爽快っ！　今日は何かいいい事あるかもっ」

すっきりとした寝覚めに私は大きく伸びをしてベッドを出た。

そして、“いい事があるかも”という予感は見事に当たった。

「おはよう、門倉さん」

(あ……)

学校へ向かう電車の中、彼が優しい笑顔で私に声を掛けてくれたのだ。

「おはよう、新堂君」

だから私も彼にとびきりの笑顔を返した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8370o/>

---

ねこねこぴーち

2010年12月14日06時09分発行